

# 「藩文庫」調査報告

——高島藩の場合を例として——

白井 純・速水香織

## 1. 「藩文庫」調査の概要

### 1.1 「藩文庫」の来歴

信州大学附属図書館教育学部図書館（以下、教育学部図書館）には、「藩文庫」の名称で呼ばれる長野県内（旧筑摩県内）諸藩藩校由来と思しき典籍が所蔵されている。文庫の概要は滝澤（1989）に詳しく、現在の状態は西（2015）にも紹介されている。また、信州大学附属図書館教育学部分館（当時）が発行した『旧長野師範学校所蔵図書』及び「信州諸藩の藩校図書」目録』（1989）（以下、旧目録）は同館が所蔵する「藩文庫」を含む古典籍<sup>1</sup>を一覧する目録だが、滝澤（1989）が指摘するように不正確な部分が認められ現状との不一致がある。旧目録は滝澤による原本悉皆調査に基づく調書より作成されたものと思いが、調書との不一致も少なくないようであり、完全に信頼できる目録は現在に至るまで存在しない。

本稿の著者二名が主催する「藩文庫研究会」は、2015年初夏に行った予備調査をふまえ、調査方針について教育学部図書館および教育学部西一夫教授とも相談したうえで、「藩文庫」を含む教育学部所蔵典籍の再整理を行うことにした。以下は、その調査の概要と、それによって浮かび上がってきた文庫の複雑な来歴、および「藩文庫」に象徴される地域資料が直面する困難な状況の報告である。

### 1.2 典籍調査の進行

「藩文庫研究会」が調査を開始した2015年初夏の時点では、「藩文庫」由来の典籍は「藩文庫」に関係のない旧長野師範学校由来の典籍に混在していた。「藩文庫」由来の典籍とその他の旧長野師範学校由来の典籍が元々の状態とは異なった形で存在することは西（2015）にも指摘されるとおりで、「藩文庫研究会」は教育学部図書館とも相談のうえ、以下を基本的方針とした。

- ・ 一体化している典籍をそれぞれの来歴に基づいて分離しつつ文書箱に収納する
- ・ 悉皆調査を行って調書を作成する
- ・ 簡易目録を電子化して閲覧等に供する

ここでいう来歴とは、

- ・ 藩文庫……飯田藩、高島藩、高遠藩、松本藩、竜岡（西之口）藩旧蔵の典籍
- ・ 浅井文庫……浅井洌<sup>2</sup>旧蔵の典籍
- ・ 師範学校……「藩文庫」「浅井文庫」を除く長野師範学校旧蔵の典籍

であり、高遠藩旧蔵典籍は平成14年3月より高遠町図書館に委託管理されて現在に至るが、

後述のように「藩文庫研究会」の調査によって一体化した典籍群のなかから新たに10点を見出した<sup>iii</sup>。

調査は原本を確認して分類することから開始した。速水が原本の確認を行い、白井が電子化された「旧目録」（教育学部図書館によって作成され内部で利用されていたもの）との対照を担当して原本照合（インスペクション）を行った。この作業は2015年度に完了し、文書箱はその後の教育学部図書館の模様替えに伴って別室に移動し現在に至っている。

続いて2016年度は信州大学附属図書館中央図書館の理解と配慮のもと同館に専用の調査室を設け、飯田藩旧蔵典籍から原本調査と調書作成を開始した。この作業は同年10月に終了し、各典籍に新たな資料番号を与えて教育学部図書館に返納した。

これまでの調査で判明した事実は以下のとおりである。

- ・「旧目録」の分類と原本の状態が一致しないことがある
- ・「旧目録」では存在することになっている典籍の原本照合ができない事例が少なくない
- ・「旧目録」には存在しない典籍がいくらか見出される

「旧目録」が一部不正確なことは既に指摘されていることであり、分類の変更によってある程度は解決する。典籍の原本照合ができない事例については、たとえ旧目録が不正確であっても存在しない典籍を目録に掲載するとは考えにくく、調書が残っていることからしても目録作成の段階には原本が存在したと一応は考えられる。したがって、それ以降で何らかの事情による典籍の流出があったことがまず疑われるが、この問題については次節で詳しく検討する。「旧目録」にない典籍が「藩文庫研究会」の調査によって発見されたのは歓迎すべき事実だろう。

## 2 「旧目録」の特徴と原本照合

### 2.1 「旧目録」の特徴

「旧目録」は全84頁、分類法に基づいて国書と漢籍を挙げる。情報は書名、寸法、冊数、刊行成立年、分類（飯田、高島、高遠、松本、竜岡（西之口）、浅井、無印は師範学校）であり、他は著しい汚損がある場合に注記するに留まる。問題とされるのは、注記はあるものの「藩文庫」と「師範学校旧蔵図書」が目録上で一体化し、「藩文庫」としてみた場合には旧藩所蔵の典籍の状態がよく分からないことである<sup>iv</sup>。

教育学部分館長（当時）田卷義孝氏による跋文には、特別経費を得て目録化を達成したことが紹介され、懸案だった典籍の整理を達成したことの安堵感と充実感が滲み出ているが、短期間での事業だったことも窺え、このことが拙速となって先述のような原本との不一致を生じたと思われる。

また、「旧目録」の情報の出所となったと思しい、滝澤貞夫による原本調査に基づく調書にはより詳しい情報が記録されているが、これとの紐付けはなされず情報の利用が難しいことが惜しまれる<sup>v</sup>。

### 2.2 原本照合から見えること

原本照合によって「旧目録」上に存在する典籍が、現在の資料群に存在しない事例が少な

くないことが明らかになった（表1）<sup>vi</sup>。

	飯田	高島	竜岡	松本	浅井	師範	他	高遠
書名・冊数一致	57	87	6	0	96	422	0	7
書名のみ一致	0	0	0	3	0	3	0	0
不一致（流出）	12	21	1	0	8	257	0	0
追加	16	7	0	0	39	0	19	3
流出率	17.4%	19.4%	14.3%	0.0%	7.7%	37.7%	—	—

表1 分類別にみた典籍の出入りの状況

「書名・冊数一致」は「旧目録」と原本で完全に照合ができた点数で、「書名のみ一致」はおそらく同一典籍を指すと思われるが冊数が一致しない（一部が流出）点数である。「不一致」は原本が確認できない。全体点数に対する「不一致」点数の比率を「流出率」として示したが、「師範学校旧蔵図書」において流出率が非常に高いことが見て取れる。「追加」は「藩文庫研究会」の調査によって各藩旧蔵であることが明らかになった点数で、これらは旧目録では「師範学校旧蔵図書」（目録上は無印）に分類されていたものを含むが、今回の集計ではこれらの所属の変更を除いて算出しているため、純粹に流出した点数ということになる。

流出は各藩旧蔵の典籍についても無視できる点数ではなく、流出した典籍の行方を追跡する必要がある。最近の出来事であった筈で、あるいは教育学部図書館のどこかにこれらの流出典籍があるのかもしれない。同館にはこれ以外に明治時代以降の教科書群が存在しており、旧長野師範学校の明治時代初期の教科書が混入した可能性もあるが、現時点で詳細は不明である。

### 3. 高島藩旧蔵典籍の保存伝来状況

#### 3.1 「高島学校蔵書目録」との比較

教育学部図書館が所蔵する「藩文庫」は旧長野師範学校の蔵書だが、どのような来歴を持つのだろうか。

滝澤（1989）、高橋（2004）には「藩文庫」の一部であった高遠藩旧蔵典籍の来歴についての詳しい説明があり興味深い。それによれば、当初は高遠藩進徳館の蔵書だったものが、明治時代初期の学校設立に伴って蔵書の管理について衝突が生じ、事態打開のため県庁が問題の蔵書を没収することになった。貸し出し利用中という説明で一部を引き渡さないという奇策に出る高遠町だが大半が徴収され、さらにその徴収分は県庁の火災による混乱によって分散、やがて旧長野師範学校の所蔵となり教育学部図書館の所蔵に至ったということで、平成14年3月に高遠藩旧蔵典籍の管理が高遠町図書館に委託されたのは同町の強い要望を受けてのことだという<sup>vii</sup>。なお滝澤（1989）は他藩についても同様に、県庁に徴収された典籍が師範学校図書となり現在の「藩文庫」に至るとしており、「藩文庫研究会」もその考え方に

沿って典籍の来歴を追跡している。

また同じく滝澤（1989）は高島藩旧蔵典籍について、藩校長善館とは別に明治2年に和学を扱う国学校が設立されたこと、教育学部図書館の高島藩旧蔵典籍は藩校旧蔵と思われるが国学校の蔵書と思しい和書が含まれることを指摘しており、西（2015）もこれをうけて、一部典籍を国学校の講義内容と関連付けている。

「藩文庫研究会」はこれをふまえ、調査の過程で高島藩旧蔵典籍を引き継いだ高島学校の蔵書目録の存在を見出した。蔵書目録は「高島学校蔵書目録」（以下、「高島目録」といい、明治5年に県庁に報告した記録の一部だという<sup>viii</sup>。書名と冊数のみの簡易な目録だが国書と漢籍を網羅するよう見え、洋書の原書と翻訳書も含まれる。藩校旧蔵典籍を引き継いだ明治初期の高島学校の蔵書の目録と考えられるが、後述のように正確性については疑わしい点もある。

この「高島目録」と「旧目録」高島藩旧蔵分（現存の有無を問わない）との比較を行った結果、「高島目録」全314点のうち多くの典籍が「旧目録」に掲載されていることが分かったが、漢籍が国書より多く、洋書の原書は現在の「藩文庫」に無く、洋書の翻訳書のごく一部であることに特徴がある<sup>ix</sup>（表2、参考資料1）。

	「旧目録」にあり	「旧目録」になし	一致率
国書	27	108	20.0%
漢籍	38	47	44.7%
西洋原書	0	22	0.0%
仏翻訳書	5	67	6.9%

表2 「高島目録」と「旧目録」の比較

続いて、「旧目録」高島藩旧蔵分の全114点を「高島目録」と比較した結果が以下である（表3、参考資料2）。現存の有無と冊数を比較要素として加味した。表2との間で一致点数が異なるのは漢籍のまとめ方が異なるためである。

「藩文庫」現存典籍分			「藩文庫」流出典籍分		
書名・冊数一致	書名のみ一致	不一致	書名・冊数一致	書名のみ一致	不一致
64	20	11	5	6	8

表3 「旧目録」と「高島目録」の比較

「旧目録」高島藩旧蔵分のうち「現存典籍分」で「書名・冊数一致」の64点は、明治初期に高島学校の蔵書であり、県庁を経て師範学校図書から現在の「藩文庫」に至る典籍で、本流というべき来歴である。「流出典籍分」で「書名・冊数一致」となる『古今和歌集』二冊、『後撰和歌集』二冊、『揚子法言』六冊、『詩雋類函』四十八冊、『古詩紀』二十冊の5点は平成4年の段階まで引き継がれてきたが最近流出したと思われる典籍である。「書名のみ一致」は一部が流出したもののだが、「高島目録」の正確性によっては本流と見なしてよい典籍

もあるかと思われる。

「現存典籍分」で「不一致」の11点は、「高島目録」になく平成4年の「旧目録」と現在の「藩文庫」高島藩旧蔵典籍に見える典籍<sup>x</sup>で、明治5年の「高島目録」作成時の取りこぼしか、それ以前に取り分けられ後から合流して「藩文庫」の一部となった典籍だと考えられる。「流出典籍分」で「不一致」の8点は、「高島目録」になく、「旧目録」に見え、現在の「藩文庫」に見えない典籍である。「高島目録」の正確性や、先に説明したように「高島目録」を迂回する来歴があったとすればあり得ない話ではないが、「旧目録」の正確性は疑問のあるところなので、これを再検討する必要もあるだろう。

例えば、「旧目録」高島藩旧蔵分に『揚子法言』は2点あり、寸法と冊数は全く同じで刊行年の萬治2年も同じだが、「高島目録」と「藩文庫」高島藩旧蔵分の現状では1点しかない。同様に『行雲樓遺稿』も「藩文庫目録」高島藩旧蔵分として2点あり、「高島目録」と「藩文庫」高島藩旧蔵分の現状では1点しかないが、「旧目録」では寸法が1mm異なるほか同様であり、1点に天保11年の刊行年が注記され別の1点にそれが無いことが注記忘れとすれば、ほぼ同等とみてよい。

これらが「旧目録」で誤って同一典籍を二重に掲載したものだとなれば、先に紹介した典籍の流出点数にも再検討が必要となる。言うまでも無く、元から存在しない典籍が流出する筈もないからである。

### 3.2 「長善館資料目録」との比較

諏訪市博物館には高島藩旧蔵典籍が保管されており、「長善館資料目録」により内容を知ることができるが、滝澤（1989）にはこの典籍群についても紹介されている。

諏訪高島藩（三万石）は、享和三年石城南陔に命じて長善館を設置、更に、明治二年五月、飯田武郷らの主唱によって国学校が併設、長善館で漢字、国学校では和学が講ぜられていた。筑摩県が徴収したのは、長善館所蔵分であったが、現在教育学部へ来ている書籍が、漢籍ばかりではないので疑問が残る。ところで現在、諏訪市立図書館には、藩校の図書と思われる書籍が、学部へ来ている五九点の数倍以上所蔵されている。しかし調査してみると、長善館旧蔵本は含まれていない模様である。（p.57）

「藩文庫研究会」の調査では、諏訪市図書館の関係典籍が移管された先の諏訪市博物館に所蔵される「長善館資料目録」掲載の典籍について以下が明らかになった。

- ・「高島学校」蔵書印のある典籍がある
- ・「高島小学校」その他の蔵書印のある典籍がある
- ・「高島目録」「藩文庫」高島藩旧蔵分にはみられない典籍がある
- ・「高島目録」には「藩文庫」高島藩旧蔵分と「長善館蔵書目録」掲載典籍にはみられない典籍がある

「高島学校」蔵書印は、教育学部図書館の「藩文庫」高島藩旧蔵分のすべての典籍に認められ、漢籍については藩校長善館の蔵書であったと推定できるため、滝澤（1989）が諏訪市図書館所蔵の典籍に長善館旧蔵本は含まれないとしたのは何かの間違いだろう。また、筑摩

県が徴収したのが長善館と国学校、さらにその他の典籍を収集することで構成されていた高島学校の典籍である<sup>xi</sup>とすれば、「藩文庫」高島藩旧蔵分に滝澤（1989）が指摘するように国学校蔵書に由来する国書が含まれることは容易に説明が付き<sup>xii</sup>、「高島目録」にみえる洋書翻訳書群の一部であり、「高島学校」蔵書印を押された『三語便覧』『五方通語』『舎密局必携』『同水利新説』『警備術原』といった典籍が「藩文庫」高島藩旧蔵分に含まれることも同様に理解できるだろう。

したがって、高島藩旧蔵典籍の所蔵が諏訪市博物館と教育学部図書館に限られるなら、これらの所蔵典籍の主要部分が「高島目録」に一致すると期待できる。例えば「高島目録」には漢籍の注釈書をあつめた「経解」部分があるが、大部分が諏訪市博物館に所蔵されている典籍に一致し、箱への収容と番号付与の状況からみても、高い蓋然性をもって同一典籍群であると考えられる。しかし、その他の典籍についても一致するかと思われる典籍はあるものの、典籍自体が珍しくない典籍であった場合には、「高島目録」が簡素であることも災いして同一典籍であるかの判断が難しい。

調査から見えてきた別の事実として、「高島目録」には「藩文庫」高島藩旧蔵分と諏訪市博物館所蔵「長善館資料目録」掲載典籍にはみられない典籍が相当数あるということで、何れかの段階での流出が疑われる。この流出部分に藩校由来の典籍が含まれていることも考えておく必要がある。

このような流出と収集が繰り返された結果、現在の状態はそれらの影響を受けて複雑になっている（図1）。

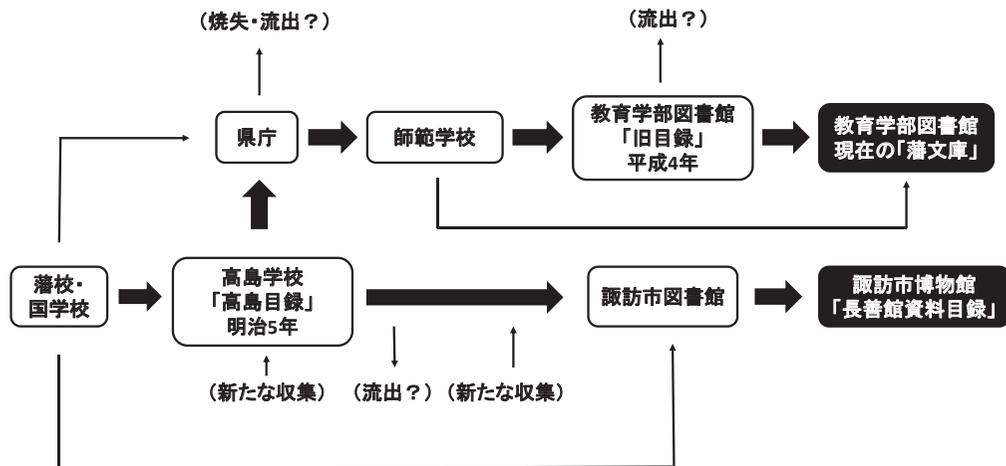


図1 高島藩旧蔵典籍の来歴

典籍の流出が高島藩固有の問題であればともかく、県庁に徴収されて以降の問題だとすれば他藩の典籍にも問題が及び、問題は相当に深刻ということになる。何れにしても、教育学部図書館「藩文庫」の典籍を以て藩校蔵書の全体を語ることは不可能であることが明らかになった。この事実は、各地に散在する典籍を結びつける広い視野が必要であることを示している。

#### 4. 地域資料の展望——まとめに代えて——

長野県の地域資料の一つである「藩文庫」は、過去に度重なる流出に曝された結果、当初の姿を留めるものではなくなっているが、これは特殊な事例ではなく、典籍を財産として大切に保管してきた藩校が消滅し、典籍が藩校のものではなくなって以来、不可避に生じた課題である。

藩校由来の典籍は、個々の典籍の価値とともに、典籍群からみた藩校教育の様子を知る手がかりとなる。ごく一般的な漢籍が各藩で同じように利用される一方、個性的な典籍がみられる場合も少なくない。こうした藩校蔵書群相互の比較から見えてくる新しい事実もあるだろう。

典籍からみた地域教育・地域文化の蓄積（アーカイヴ）の実態を明らかにすることで、典籍をはじめとする地域遺産に価値を認める考え方が広く定着することを願っているが、そのためにはまず、地域遺産が保全されなければならない。その意味で、筆者が訪問した高遠町図書館の典籍の保管状態は他の模範となるものであった。しかし本来であれば、国立大学の図書館こそが地域の文化遺産を保全し活用する中心的機関として、他の図書館や博物館の見本となることが望まれるだろう。「藩文庫研究会」の活動が、その一助となれば幸いである。

#### 参考文献・資料

- 信州大学附属図書館教育学部分館編『「旧長野師範学校所蔵図書」及び「信州諸藩の藩校図書」目録』, 1989
- 滝澤貞夫「松代文庫について」『松代—真田の歴史と文化—』第2号, 真田宝物館, 1989
- 高橋良政編『高遠藩進徳館蔵書本日録』, 高遠町図書館, 2004
- 西一夫「藩文庫の漢籍資料瞥見」『信大言語教育』25号, 信州大学言語教育学会, 2015
- 滝澤貞夫による原本調査調書（非公開）

#### 謝辞

諏訪市図書館の小池裕貴氏, 諏訪市博物館の小林純子氏, 嶋田彩乃氏, 諏訪教育会の渡邊文雄氏, 松本市中央図書館の寺岡稔高氏, 信州大学教育学部の西一夫氏, 信州大学附属図書館中央図書館の折井匡氏, 信州大学附属図書館教育学部図書館の武田佳代氏, 山口美咲氏の関係各位には資料閲覧, 情報提供など様々な点で大変なお世話になりました。記して感謝申し上げます。

「藩文庫研究会」の活動は平成28年度の部局重点事業計画の一部として採用され, 予算的措置を得て円滑な調査を実施することができました。記して感謝申し上げます。

「藩文庫研究会」は信州大学人文学部教員の速水香織（日本文学）, 白井純（日本語学）を中心に, 鈴木映梨香（修士2年）, 矢澤静佳（修士1年）, 赤羽夏美（学部4年）, 伊藤智弘（学部4年）, 田中椋子（学部3年）, 山本文（学部3年）の協力のもと調査を進めています。

す。志を同じくし自発的に調査に参加する院生や学生と共に調査ができることは望外の幸せであると感じています。

<sup>i</sup> 「藩文庫」は旧長野師範学校所蔵の典籍であり、蔵書印からもそのことが確認できる。目録にある旧長野師範学校所蔵図書は旧長野師範学校所蔵の典籍（明治初期以前）から「藩文庫」を除いた部分ということになる。なお、旧長野師範学校所蔵の書籍にはこれら以外（明治中期以降）もあり、現在の分類とのずれを生じているが、本稿では目録の名称を踏襲し、旧長野師範学校所蔵で「藩文庫」「浅井文庫」を除く明治初期以前の典籍を「師範学校旧蔵」と呼ぶことにする。

<sup>ii</sup> 浅井洌は旧長野師範学校教諭で、県歌「信濃の国」を作詞した人物である。

<sup>iii</sup> これらの典籍は近く高遠町図書館の委託管理となる予定である。

<sup>iv</sup> 反面、同一書名のもとに旧蔵者を異にする典籍が並ぶことになり相互比較が行いやすいことは、各藩の蔵書を比較する研究にとっては利点と言えるだろう。

<sup>v</sup> 問題はあるとしても限られた時間と予算のなかで典籍の保全に貢献する先駆的な事業を達成したことは高く評価されるべきで、「藩文庫研究会」の活動も、この志を継ぐものたらんとする動機によるものである。

<sup>vi</sup> 表の数値は2016年9月時点での暫定値である。

<sup>vii</sup> 白井は2015年に高遠町図書館を訪問して一部典籍の調査を行ったが、丁寧な対応と共に、信州大学から委託された典籍が木製の書架に余裕をもって配架され、理想的な状態で保管されていることに強く感銘を受けた。このことから、現在は伊那市の一部となる高遠町の人々が旧高遠藩から引き継いだ典籍に強い愛着をもち、地域の文化遺産として大切にしていることが窺える。

<sup>viii</sup> 翻刻が長野県教育史刊行会編『長野県教育史 第七巻 史料編一 明治五年以前』長野県教育史刊行会（1972）の328頁にあり利用できる。2016年10月に「藩文庫研究会」が所蔵機関とされる諏訪教育会を訪問して原史料を捜索したが、残念ながら発見できなかった。なお、西（2015）が参考として挙げる国学校の教授過程の原史料翻刻も同書の317頁にある。

<sup>ix</sup> 比較にあたっては、「高島目録」の漢籍注釈書「経解」部分を除いている。また、書名がいくらか異なっても同定可能であると判断した部分がある。

<sup>x</sup> 蔵書印に高鳥学校の蔵書印を持つことは確認している。これに限らず、分類にあたっての判別は基本的に蔵書印によって行った。確認の過程で「旧目録」上では高鳥藩旧蔵典籍とされる『大和本草綱目』二十一冊だけが「高鳥学校」蔵書印を持たず、「高鳥氏図書記」という別の蔵書印を持つことが判明し、高鳥藩旧蔵であるか不明であることが分かった。

<sup>xi</sup> 同館の説明によれば、藩校旧蔵典籍、国学校旧蔵典籍、それ以降の高鳥学校時代に加わった典籍をあわせた典籍群を「長善館蔵書目録」としてまとめたということで、「長善館蔵書目録」掲載の典籍がすべて藩校長善館由来の典籍でないことは認識しているとのことだった。

<sup>xii</sup> 西（2015）は明確に指摘していないが、論旨からすれば国学校由来の典籍が「藩文庫」に含まれると考えているのだろう。

## 参考資料1 「高島目録」と「旧目録」の比較

分類1	分類2	書名	注記	冊数	「旧目録」にあり
国書	神書類	神代卷	三部	六冊	○
国書	神書類	玉禰		九冊	○
国書	国史類	訂正古訓古事記	四部	拾二冊	○
国書	国史類	新刻古事記	三部	九冊	○
国書	国史類	書紀集解		二十冊	○
国書	国史類	承久記		二冊	○
国書	国史類	応仁記		二冊	○
国書	国史類	大八洲記		十二冊	○
国書	国史類	明德記		三冊	○
国書	国史類	信長記		四冊	○
国書	国史類	難波戦記		五冊	○
国書	国史類	本朝武林小伝		八冊	○
国書	国史類	毛利家記		六冊	○
国書	記録類	拾芥抄		六冊	○
国書	字書類	雅言集覧		六冊	○
国書	和歌類	三代集		六冊	○
国書	和歌類	万葉集考同別記		九冊	○
国書	和歌類	加茂翁家集		五冊	○
国書	和歌類	新歌集		七冊	○
国書	文章類	湖月抄		六十冊	○
国書	文章類	玉廼小櫛		九冊	○
国書	集類	桃華藥葉		二冊	○
国書	集類	皇典文彙	三部	九冊	○
国書	雑書類	古事談		六冊	○
国書	雑書類	螢蠅抄		六冊	○
国書	雑書類	群書一覽		六冊	○
国書	雑書類	湖亭涉筆		四冊	○
国書	神書類	神代正語		三冊	
国書	神書類	神代紀髻華山蔭		一冊	
国書	神書類	神代紀葦牙		三冊	
国書	神書類	古語拾遺		一冊	
国書	神書類	新刻古語拾遺		一冊	
国書	神書類	祝詞考		三冊	
国書	神書類	出雲国造神寿後釈		二冊	
国書	神書類	祝詞正訓		一冊	
国書	神書類	神社啓蒙		八冊	
国書	神書類	神社考詳節		一冊	
国書	神書類	靈能真柱		二冊	
国書	神書類	鬼神新論		一冊	
国書	神書類	古道大意	二部	四冊	
国書	国史類	日本書紀		十五冊	
国書	国史類	続日本紀		十冊	

分類1	分類2	書名	注記	冊数	「旧目録」にあり
国書	国史類	日本後紀		十冊	
国書	国史類	続日本後紀		十冊	
国書	国史類	文徳実録		十冊	
国書	国史類	三代実録		二十冊	
国書	国史類	日本紀纂疏		八冊	
国書	国史類	日本紀通証		二十三冊	
国書	国史類	古事記伝		四十八冊	
国書	国史類	日本紀略		十四冊	
国書	国史類	大日本史		百冊	
国書	国史類	本朝通記		十五冊	
国書	国史類	史徴		十六冊	
国書	国史類	古史徴		十一冊	
国書	国史類	古史成文		三冊	
国書	国史類	皇朝史略	二部	二十冊	
国書	国史類	続同	二部	十冊	
国書	国史類	十三朝紀聞		八冊	
国書	国史類	読史余論		十二冊	
国書	国史類	古史伝	廿八巻迄	二十六冊	
国書	国史類	歴朝詔詞解		六冊	
国書	国史類	続日本紀考証		十二冊	
国書	国史類	野史		百六冊	
国書	国史類	三鏡		二十一冊	
国書	国史類	栄華物語		二十一冊	
国書	国史類	大鏡		六冊	
国書	国史類	平家物語		十二冊	
国書	国史類	保元物語		四冊	
国書	国史類	平治物語		四冊	
国書	国史類	保元平治物語		六冊	
国書	国史類	東鏡		五十一冊	
国書	国史類	和漢年契		一冊	
国書	国史類	大平記大全		五十冊	
国書	国史類	帝王編年記		二十七冊	
国書	国史類	南朝紹運録		四冊	
国書	国史類	奥羽軍記		四冊	
国書	国史類	慶元通鑑		四冊	
国書	国史類	南朝太平記		二十五冊	
国書	国史類	通語	二部	六冊	
国書	国史類	日本外史	二部	三十四冊	
国書	国史類	日本逸史		二十一冊	
国書	国史類	前太平記		二十一冊	
国書	国史類	西籍概論		三冊	
国書	国史類	逸史		十三冊	
国書	国史類	宇治拾遺物語		十五冊	

分類1	分類2	書名	注記	冊数	「旧目録」にあり
国書	国史類	諸家大系図		十四冊	
国書	国史類	新撰姓氏録		四冊	
国書	国史類	鎌倉將軍譜		一冊	
国書	国史類	京都將軍譜		二冊	
国書	国史類	織田信長譜		一冊	
国書	国史類	豊臣秀吉譜		三冊	
国書	国史類	東照宮年譜		三冊	
国書	記録類	類聚三代格		十六冊	
国書	記録類	江家次第		十九冊	
国書	記録類	制度通		十三冊	
国書	記録類	京都覚書		七冊	
国書	記録類	職原抄大全		十二冊	
国書	記録類	延喜式		四十九冊	
国書	記録類	儀式		五冊	
国書	記録類	令義解		十冊	
国書	字書類	玉霰		一冊	
国書	字書類	尚古仮字格		一帖	
国書	字書類	詞乃八衢		二冊	
国書	字書類	同補遺		二冊	
国書	字書類	和訓栞		三十四冊	
国書	字書類	漢字三音考		一冊	
国書	字書類	字音仮字用格		一冊	
国書	字書類	新撰字鏡		二冊	
国書	字書類	冠辞考		十冊	
国書	字書類	古言梯		一冊	
国書	字書類	詞之王乃緒		七冊	
国書	字書類	豆爾乎波紐鏡		一帖	
国書	字書類	和名類聚紗		五冊	
国書	和歌類	万葉集略解		三十二冊	
国書	和歌類	日本記歌之解		三冊	
国書	地理類	出雲風土記		二冊	
国書	地理類	国郡全図		二冊	
国書	地理類	陵墓一隅抄		一冊	
国書	地理類	聖蹟図誌		二冊	
国書	地理類	山陵志		一冊	
国書	文章類	土佐日記抄		二冊	
国書	文章類	佐喜艸		一冊	
国書	文章類	消息文例		二冊	
国書	集類	朝野群載		十三冊	
国書	集類	菅家文艸		六冊	
国書	集類	荷田氏創学校啓		一冊	
国書	雑書類	玉勝間		十五冊	
国書	雑書類	駅戎概言		四冊	

分類1	分類2	書名	注記	冊数	「旧目録」にあり
国書	雑書類	玉櫛笥		一冊	
国書	雑書類	塩尻		四十八冊	
国書	雑書類	出定笑語		三冊	
国書	雑書類	出定笑語附録		三冊	
国書	雑書類	気噴殿		二冊	
国書	雑書類	悟道弁		二冊	
国書	雑書類	折焚柴之記		三冊	
漢籍	經部	十三經		百三十冊	○
漢籍	經部	四書大全	(欄外・後筆)「後」	二十一冊	○
漢籍	經部	五經大全	(欄外・後筆)「前」	五十四冊	○
漢籍	經部	詩書古伝		十五冊	○
漢籍	經部	詩經説約		七冊	○
漢籍	經部	論語徴		十冊	○
漢籍	經部	弁名		二冊 合三冊	○
漢籍	經部	大学解		一冊	○
漢籍	經部	五經改点	(欄外後筆)「前」	三部 三十三冊	○
漢籍	經部	許子説文		十二冊	○
漢籍	經部	韻会小補		三十一冊	○
漢籍	經部	五車韻瑞		十八冊	○
漢籍	史部	貞觀政要		十七冊	○
漢籍	史部	大明一統志		十五冊	○
漢籍	史部	水經	(欄外・後筆)「後」唐本	十四冊	○
漢籍	史部	国史經籍志	(欄外・後筆)「前」	十冊	○
漢籍	子部	張湛注列子		四冊	○
漢籍	子部	荀子		四冊	○
漢籍	子部	墨子		六冊	○
漢籍	子部	晏子春秋		一冊	○
漢籍	子部	劉子		五冊	○
漢籍	子部	陸賈新語		一冊	○
漢籍	子部	楊子法言		六冊	○
漢籍	子部	塩鉄論		十二冊	○
漢籍	子部	何氏語林		八冊	○
漢籍	子部	白孔六帖		五十冊	○
漢籍	子部	世説新語補觴		二冊	○
漢籍	子部	事賦類		六冊	○
漢籍	子部	翰墨大全		二十冊	○
漢籍	子部	度量考		二冊	○
漢籍	集部	朱注楚辞		三冊	○
漢籍	集部	蘇東坡詩集		四冊	○
漢籍	集部	詩雋類函		四十八冊	○
漢籍	集部	古詩紀		二十冊	○
漢籍	集部	唐詩紀		三十二冊	○
漢籍	集部	古唐詩合解		八冊	○

分類1	分類2	書名	注記	冊数	「旧目録」にあり
漢籍	集部	唐詩貫珠		二十四冊	○
漢籍	集部	行雲樓遺稿		三冊	○
漢籍	經部	經解	六鹿六十套 総計六拾套	六百一冊	
漢籍	經部	欽定四經	唐本	五十八冊	
漢籍	經部	書經旁通々考		十冊	
漢籍	經部	左伝注疏		三十冊	
漢籍	經部	左伝標釈		十三冊	
漢籍	經部	左伝林注	合卷	十二冊	
漢籍	經部	校本春秋左氏伝	二部	三十冊	
漢籍	經部	弁道		一冊 合三冊	
漢籍	經部	中庸解		二冊	
漢籍	經部	小学読本		八冊	
漢籍	經部	四書改点	(欄外後筆)「後」	三部 三十冊	
漢籍	經部	管家点論語		三冊	
漢籍	經部	爾雅注疏		五冊	
漢籍	經部	康熙字典	唐本	四十冊	
漢籍	經部	康熙字典		四十冊	
漢籍	史部	史記評林	増訂	五十冊	
漢籍	史部	前漢書		三十冊	
漢籍	史部	後漢書		十八冊	
漢籍	史部	資治通鑑綱目		六十冊	
漢籍	史部	資治通鑑	二十套	百四十八冊	
漢籍	史部	国語		五冊	
漢籍	史部	戦国策		四冊	
漢籍	史部	季洪書		十二冊	
漢籍	史部	通志略		三十二冊	
漢籍	史部	明律	式部	十八冊	
漢籍	子部	管子全書		十三冊	
漢籍	子部	論衡		拾六冊	
漢籍	子部	山堂肆考		百冊	
漢籍	子部	潜確類書	唐本	八十冊	
漢籍	子部	古学彙纂		二十一冊	
漢籍	子部	堯山堂外記	唐本	十六冊	
漢籍	子部	世説補		五冊	
漢籍	子部	新刻蒙求		三冊	
漢籍	子部	円機活法		四十冊	
漢籍	子部	演義三国志		廿四冊	
漢籍	子部	文林縞繡		六十四冊	
漢籍	子部	釈親考		二冊	
漢籍	集部	李善注文選		十六冊	
漢籍	集部	六臣注文選		二十冊	
漢籍	集部	韓文		十冊	
漢籍	集部	柳文		十冊	

分類1	分類2	書名	注記	冊数	「旧目録」にあり
漢籍	集部	孟浩然集		一冊	
漢籍	集部	增評八大家文		十六冊	
漢籍	集部	文章軌範		三冊	
漢籍	集部	続文章軌範		三冊	
漢籍	集部	詠物詩選		六冊	
漢籍	集部	兪州四部稿		七十二冊	
西洋原書		万国史	仏	一卷	
西洋原書		那勃烈翁別伝	ナポレオン 同	一卷	
西洋原書		窮理書	同	一卷	
西洋原書		大地理書	同	一卷	
西洋原書		小地理書	同	一卷	
西洋原書		農越爾辞書	ノエル 同	一卷	
西洋原書		別那爾辞書	ベナル 同	一卷	
西洋原書		小辞書	仏	一卷	
西洋原書		小辞書	同	一卷	
西洋原書		坤輿図	同	一卷	
西洋原書		医学辞書	トーマス氏	一卷	
西洋原書		解剖書	クレール氏	一卷	
西洋原書		和英辞書		一卷	
西洋原書		解剖書	ウエルソン氏	一卷	
西洋原書		舎密書	ウエルス氏	一卷	
西洋原書		医学辞書	トンクリンソン氏	一卷	
西洋原書		辞書	ウエブストルロエン氏	一卷	
西洋原書		地理書	コルネル氏	二冊	
西洋原書		窮理書	クエツケンボス氏	一卷	
西洋原書		窮理書	ガノツト氏	一卷	
西洋原書		ハイスクール辞書	ウエブストル氏	一卷	
西洋原書		小辞書	ゼンキンス氏	一卷	
仏翻訳書		三語便覧		三冊	○
仏翻訳書		五方通語		三冊	○
仏翻訳書		舎密局必携		三冊	○
仏翻訳書		同水利新説		二冊	○
仏翻訳書		警備術原		二十三冊	○
仏翻訳書		地理全志		十冊	
仏翻訳書		仏語箋		一卷	
仏翻訳書		仏語明要附録	右五部朝倉保佑脩行中東 京御買上	一卷	
仏翻訳書		海上砲術全書		拾五冊	
仏翻訳書		海上砲具全図		一折	
仏翻訳書		陸砲発蒙		拾二冊	
仏翻訳書		三兵答古知幾	貌郎度氏	拾五冊	
仏翻訳書		舎密開宗		七冊	
仏翻訳書		築城典刑	英国ス氏	五冊	

分類1	分類2	書名	注記	冊数	「旧目録」にあり
仏翻訳書		仏語明要	右小平正俊阪本俊秀延川 和彦修業中東京御買上	四冊	
仏翻訳書		格物入門		七冊	
仏翻訳書		化学入門		七冊	
仏翻訳書		気海観瀾広義		五冊	
仏翻訳書		瀛環志略		十冊	
仏翻訳書		理化新説		四冊	
仏翻訳書		輿地誌略		三冊	
仏翻訳書		泰西史鑑	上編	六冊	
仏翻訳書		西洋事情		十冊	
仏翻訳書		海軍沿革論		四冊	
仏翻訳書		西洋聞見録		八冊	
仏翻訳書		西国立志編		十一冊	
仏翻訳書		立憲政体略		一冊	
仏翻訳書		真政大意		二冊	
仏翻訳書		泰西国法論		四冊	
仏翻訳書		仏蘭西刑法		五冊	
仏翻訳書		同民法		四冊	
仏翻訳書		勸善訓蒙		三冊	
仏翻訳書		学校規範		二冊	
仏翻訳書		洋算用法		二冊	
仏翻訳書		洋算独学		四冊	
仏翻訳書		分数術		一冊	
仏翻訳書		西洋開拓新説		二冊	
仏翻訳書		泰西農学		六冊	
仏翻訳書		経済原論	三卷ヨリ九卷迄	七冊	
仏翻訳書		兵法中学		七冊	
仏翻訳書		兵学提要		二冊	
仏翻訳書		游泳小学		一冊	
仏翻訳書		砲術小学		四冊	
仏翻訳書		軍用火料新書		三冊	
仏翻訳書		砲術新篇		八冊	
仏翻訳書		火功奏式		一冊	
仏翻訳書		砲術訓蒙		八冊	
仏翻訳書		鈴木必携		一冊	
仏翻訳書		火薬製造書		一冊	
仏翻訳書		増補煩砲射擲表		一冊	
仏翻訳書		砲術便覧		一冊	
仏翻訳書		洋砲試験表		一冊	
仏翻訳書		砲兵程式		拾冊	
仏翻訳書		同図		一冊	
仏翻訳書		雷銃操法		二冊	
仏翻訳書		那破倫兵法		一冊	

分類1	分類2	書名	注記	冊数	「旧目録」にあり
仏翻訳書		野戦兵囊	前編	五冊	
仏翻訳書		同	後篇	五冊	
仏翻訳書		戦地必要		六冊	
仏翻訳書		火薬新論		二冊	
仏翻訳書		山砲操法		一冊	
仏翻訳書		山砲伝習録		一冊	
仏翻訳書		軽歩兵程式	内令言図解二冊 二部	八冊	
仏翻訳書		歩兵演範		四冊	
仏翻訳書		歩兵操典		四冊	
仏翻訳書		歩兵程式		五冊	
仏翻訳書		法普戦争誌略		八冊	
仏翻訳書		耳曼史略		二冊	
仏翻訳書		海軍図識		三冊	
仏翻訳書		野戦論		二冊	
仏翻訳書		英国歩操新式		五冊	
仏翻訳書		英国歩兵錬法	右四十二部阪本俊秀延川 和彦修行中東京御買上	八冊	

## 参考資料2 現在の「藩文庫」と「高島目録」の比較

「藩文庫」にあり	旧目録書名	ジャンル	「高島目録」と書名一致	「高島目録」と冊数一致
○	日本書紀神代卷	和書	○	○
○	羣書一覽	和書	○	○
○	訂正古訓古事記	和書	○	○
○	古事記	和書	○	○
○	古事記	和書	○	○
○	古事記	和書	○	○
○	書紀集解	和書	○	○
○	承久記	和書	○	○
○	明德記	和書	○	○
○	應仁記	和書	○	○
○	毛利家記	和書	○	○
○	信長記	和書	○	○
○	難波戦記	和書	○	○
○	本朝武藝小傳	和書	○	○
○	古事談	和書	○	○
○	大八洲記	和書	○	○
○	國史經籍史	和書	○	○
○	度量衡考	和書	○	○
○	桃華菜葉	和書	○	○
○	雅言集覽	和書	○	○
○	拾芥抄	和書	○	○
○	源氏物語湖月抄	和書	○	○
○	源氏物語玉の小櫛	和書	○	○
○	拾遺和歌集	和書	○	○
○	萬葉考別記	和書	○	○
○	新歌集	和書	○	○
○	加茂翁家集	和書	○	○
○	詩經説約	漢籍	○	○
○	論語徴	漢籍	○	○
○	大學解中庸解	漢籍	○	○
○	易經大全	漢籍	○	○
○	詩經大全	漢籍	○	○
○	春秋大全	漢籍	○	○
○	許氏説文	漢籍	○	○
○	晏子春秋	漢籍	○	○
○	水經注	漢籍	○	○
○	荀子全書	漢籍	○	○
○	陸賈新語	漢籍	○	○
○	揚子法言	漢籍	○	○
○	貞觀政要	漢籍	○	○
○	墨子全書	漢籍	○	○

「藩文庫」にあり	旧目録書名	ジャンル	「高島目録」 と書名一致	「高島目録」 と冊数一致
○	劉子全書	漢籍	○	○
○	唐宋白孔六帖	漢籍	○	○
○	事類賦	漢籍	○	○
○	詩雋類函	漢籍	○	○
○	何氏語林	漢籍	○	○
○	世説新語補	漢籍	○	○
○	沖虚至徳眞經	漢籍	○	○
○	唐詩紀	漢籍	○	○
○	古唐詩合解	漢籍	○	○
○	唐詩貫珠箋釋	漢籍	○	○
○	翰墨大全	漢籍	○	○
○	辨名	漢籍	○	○
○	湖亭涉筆	漢籍	○	○
○	行雲樓遺稿	漢籍	○	○
○	大明一統志	漢籍	○	○
○	楚辭	漢籍	○	○
○	四書大全	漢籍	○	○
○	詩書古傳	漢籍	○	○
○	鑒鐵論	漢籍	○	○
○	強盛術原	翻訳書	○	○
○	三語便覽	翻訳書	○	○
○	舍密局必攜	翻訳書	○	○
○	五方通語	翻訳書	○	○
○	皇典文彙	和書	○	×
○	訂正古訓古事記	和書	○	×
○	玉あられ	和書	○	×
○	萬葉考	和書	○	×
○	周易兼義	漢籍	○	×
○	尚書註疏	漢籍	○	×
○	毛詩註疏	漢籍	○	×
○	周禮註疏	漢籍	○	×
○	儀禮註疏	漢籍	○	×
○	禮記註疏	漢籍	○	×
○	春秋公羊傳註疏	漢籍	○	×
○	論語註疏	漢籍	○	×
○	孟子註疏	漢籍	○	×
○	校定音訓詩經改點	漢籍	○	×
○	書經大全	漢籍	○	×
○	禮記大全	漢籍	○	×
○	五車韻瑞	漢籍	○	×
○	蘇東坡詩集注	漢籍	○	×
○	古今韻會舉要小補	漢籍	○	×

「藩文庫」にあり	旧目録書名	ジャンル	「高島目録」と書名一致	「高島目録」と冊数一致
○	西洋水利新説	翻訳書	○	×
○	大和本草綱目	和書	×	×
○	尚書通考	漢籍	×	×
○	論語	漢籍	×	×
○	孟子	漢籍	×	×
○	孟子序説	漢籍	×	×
○	兩漢雋言	漢籍	×	×
○	左國映詞	漢籍	×	×
○	潛確居類書	漢籍	×	×
○	楚騷倚語	漢籍	×	×
○	文選錦字	漢籍	×	×
○	書傳旁通	漢籍	×	×
×	古今和歌集	和書	○	○
×	後撰和歌集	和書	○	○
×	揚子法言	漢籍	○	○
×	詩雋類函	漢籍	○	○
×	古詩紀	漢籍	○	○
×	神代卷	和書	○	×
×	韻會小補	漢籍	○	×
×	古今韻會舉要小補	漢籍	○	×
×	螢蠅抄	漢籍	○	×
×	唐宋白孔六帖	漢籍	○	×
×	行雲樓遺稿	漢籍	○	×
×	新刻古事記之端文	和書	×	×
×	詩經説約	漢籍	×	×
×	孟子	漢籍	×	×
×	論語集注大全	漢籍	×	×
×	兩漢雋言	漢籍	×	×
×	墨子全書	漢籍	×	×
×	文選	漢籍	×	×
×	文選	漢籍	×	×

(2016年10月31日受理, 12月13日掲載承認)